

初期介護実習後の自己覚知と自己理解

Students' self-awareness and self-perception
after the initial stage of care work practice in nursing homes

赤 沢 昌 子

Masako AKAZAWA

要旨

介護学生の初期介護実習後の自己変化またそのことを自己覚知しているかを明らかにし、自己覚知の有無により自己理解に差があるかを検討した。介護学生1年98名を対象に自己覚知用紙、自己理解チェックシート、プロフィール表を用い初期介護実習終了1週間内に質問紙調査を行った。その結果、ほとんどの学生は初期介護実習において自己変化しており、そのことを自己覚知していた。自己変化に影響を与えたことは「利用者」「施設職員」からの「態度」「行動」であった。また、自己覚知の有無によって自己理解には有意な差がなかったが、自己理解の10領域にはそれぞれ関係があり、影響を及ぼしあっていた。

キーワード

初期介護実習 自己変化 自己覚知 自己理解

I はじめに

今日の介護学生の傾向は入学前に家族の介護をした経験のあるものは少なく、また挨拶など社会的マナーやコミュニケーションもおぼつかず、学習だけでなく物事に対する意欲が見られない傾向がある。思春期であり精神的不安定、入学したばかりで環境的に不安定な状態の中で、1年生の初期介護実習（以後初期実習）を6月から7月に行うことが多く、職業人として求められる技術・態度、その他礼儀作法も十分に身につけないまま実習に出ている現実がある。そのため、初期実習では社会へ触れリアリティーショック¹⁾を受けて、やる気がなくなる学生も多い。

しかし反対に実習後の学生に実習前では見られなかった変化があり驚きを感じる時もある。武藤²⁾は「介護実習に対する心構えは実習経験によって全般に肯定的な方向へ変化する」と述べているように、これまでも実習の有意義性は多く述べられてきている。又有意義性があることから教授活動のかかわり方も重要視されている。^{3) 4)}

しかし実際、学生自身は自分の変化を覚知しているのだろうか。またどこが変わったと思っている学生も、どんなことによって自分は変わったかわからない状態ではないか。高橋⁵⁾は「社会福祉援助者の自己覚知は、援助者が自分の内面を良く知ることによってクライアントを傷つけたり、その成長を阻止したりというような、マイナスの影響をもたらさないように援助を提供していくために援助者に求められている不可欠な重要な概念である。」と述べている。自己覚知のレベルも様々^{6) 7)}であるが、自分自身を知ることによって自己理解ができ

自己概念が明確となり、今後介護福祉士を目指す学生の質の向上にもつながっていくと考える。そこで、学生の自己覚知、自己理解に、初期介護実習が及ぼす影響を調べた。

II 研究目的

1. 介護学生は初期実習後に自己変化していると思うだろうか。その内容は何か。
2. 自己覚知の有無により自己理解に差があるか。
3. 自己理解の領域にはそれぞれ関係があるか

III 用語の操作上の定義

自己変化：初期実習後に良くも悪くも些細なことでも自分が変わったこと

自己覚知：初期実習後に良くも悪くも些細なことでも自分が変わったと思っていること。

IV 研究方法

1. 研究対象

介護福祉学科 1 年 98 名

2. 測定用具

1) 初期実習で自分は変わったか、それは何が影響していると思うかを問う自作の質問紙を作成した。(自己覚知用紙) 尺度の信頼係数は α 係数 0.49 と低いため分析には「初期実習で自分は変わったか、変わらなかったか」の項目のみを使用し、また内容については度数のみとする。

2) 福山の自己理解チェックシート⁸⁾：自分自身について 10 領域（1 領域につきそれぞれ 10 項目）計 100 項目のチェックシートである。10 領域は「学校適応」「意欲」「精神的健康」「自尊感情」「コミュニケーション」「セクシュアリティ」「アイデンティティ」「ソーシャルスキル」「家族関係」「利用者との関係」に分かれており、自己概念の明確化を図ることを目的としている。本研究では介護福祉士に合うような言葉に一部変更して使用することとした。尺度の信頼係数は α 係数 0.90 であり信頼性を確保している。

プロフィール表：上記の 10 領域がそれぞれ 5 段階（10：低い～50：高い）からなる、自己理解チェックシートの解答用紙。

3. 調査方法

初期実習後、1 週間以内の授業終了後にプロフィール表を配布し今の自分のイメージに印（前）をつける。自己覚知用紙、チェックシートを配布・回答し、その結果をプロフィール表に記入（後）する。プロフィール表の前後について、ずれの内容やその背景について学生各自で考え理解する。自己覚知用紙、チェックシートについてはその場で回収する。プライバシー保護のため回答は無記名とし、学生がランダム回収及び教壇机上に提出する。

4. 倫理的配慮

調査の協力は自由であり、不利益にならないこと、得られた結果は本研究のみとし、他の目的では使用しないことを説明する。

5. 調査期間

調査対象期間 2006年6月26日～7月7日
アンケート実施日 2006年7月7日

6. 分析方法

尺度の信頼性の検討にCronbachの α 係数を算出した。自己覚知の有無により自己理解に差があるかは度数にかなり偏りがあり、一方の度数が少ないためMann-Whitney検定を行い、自己理解それぞれの関係には回帰・重回帰分析をSPSSソフトにて行った。統計的有意水準は p 値が0.05以下とした。

V 結果

1年の介護学生98名（男子学生26名を含む）を対象とした結果、回答が得られたのは83名（回収率84.8%、有効回答率100%）であった。社会人経験者はいなかった。

1. 自己覚知と自己変化の内容

「実習で自分は変わったと思う」と答えた学生は78人（93.9%）であり、その中で「変わったと思われること」については44人（56.4%）が「介護の考え方（介護ってこうなんだ）が分る」、20人（25.6%）が「学習の取り組み方（勉強する必要性）」であり、10人（12.8%）が「社会的な態度ができた」、3人（3.8%）が「介護の考え方が分らなくなった」、1人（1.3%）が「学習の取り組み方が分らなくなった」と続いた。（図1参照）「変わった事に一番影響を与えたもの」は32人（41.0%）が「利用者」、26人（33.3%）が「施設職員」、12人（15.4%）が「施設実習担当者」であり、3人（3.8%）が「勉強したこと」、2人（2.6%）が「教員」、「ゼミ教員」「実習仲間」「友人」がそれぞれ1人（1.3%）であった。（図2参照）「影響を与えられたこと」は32人（41.0%）が「態度」、20人（25.6%）が「行動」、19人（24.4%）が「言葉」、7人（9.0%）が「内容」であった。（図3参照）

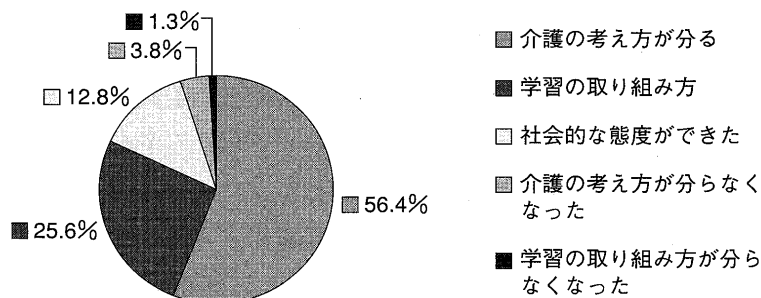


図1 自己覚知かつ変ったと思われること

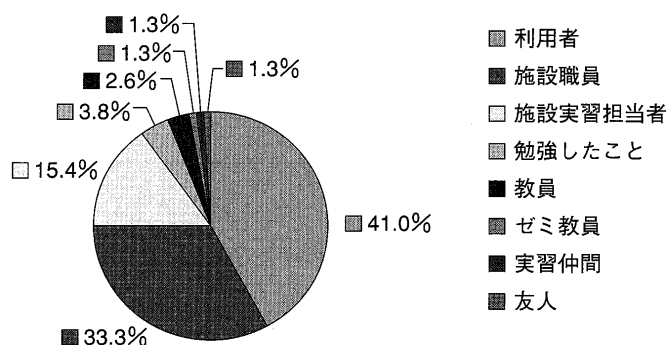


図2 変わった事に一番影響を与えたもの

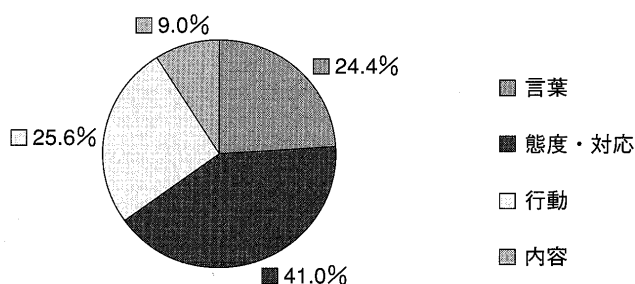


図3 影響を与えられたこと

2. 自己覚知と自己理解

自己覚知の有無により「自己理解の10領域それぞれの総和平均」に差があるかMann-WhitneyのU検定を行った。自己覚知有りの平均ランクは「精神的健康」「自尊感情」41.5（最低）～「ソーシャルスキル」43.3（最高）、自己覚知無しの場合平均ランクは「ソーシャルスキル」22.1（最低）～49.8「自尊感情」（最高）であった。この数字において一番差があると考えられる「ソーシャルスキル」も0.055にて有意差はなく、またすべての項目についても有意差はなかった。（表1参照）

3. 自己理解の領域それぞれには関係があるか

自己理解の10領域「学校適応」「意欲」「精神的健康」「自尊感情」「コミュニケーション」「セクシュアリティ」「アイデンティティ」「ソーシャルスキル」「家族関係」「利用者との関係」を他9領域で回帰分析したところ、ほとんどに有意な関係があった。（表2参照）しかしその中で「セクシュアリティ」に有意に関係するものが「自尊感情」「家族関係」だけであったため、「セクシュアリティ」を除き、9領域が他から与えられる影響を見るために8領域で重回帰分析を行った。その結果「学校適応」は「意欲」、「意欲」は「学校適応」「自尊感情」「アイデンティティ」、「精神的健康」は「自尊感情」「コミュニケーション」、「自尊感情」は「意欲」「精神的健康」「コミュニケーション」、「コミュニケーション」は「精神的健康」「自尊感情」「利用者との関係」、「アイデンティティ」は「意欲」「利用者との関係」、「ソーシャルスキル」は「家族関係」、「家族関係」は「ソーシャルスキル」「利用者との関係」、「利用者との関係」は「コミュニケーション」「アイデンティティ」「家族」に有意な関係があった。（表3参照）

表1 検定統計量

平均ランク	41.8	41.5	42.3	41.9	42.4	43.3	42.4	42.1
Mann-Whitney の U	45.0	49.7	49.8	43.2	35.8	22.1	35.4	41.1
学校適応	0.788	0.473	0.473	0.703	0.570	0.055	0.545	0.933
意欲	0.680	0.473	0.473	0.703	0.570	0.055	0.545	0.933
精神的健康	0.473	0.473	0.473	0.703	0.570	0.055	0.545	0.933
自尊感情	0.473	0.473	0.473	0.703	0.570	0.055	0.545	0.933
コミュニケーション	0.473	0.473	0.473	0.703	0.570	0.055	0.545	0.933
ソーシャルスキル	0.473	0.473	0.473	0.703	0.570	0.055	0.545	0.933
家族関係	0.473	0.473	0.473	0.703	0.570	0.055	0.545	0.933
利用者との関係	0.473	0.473	0.473	0.703	0.570	0.055	0.545	0.933

P<0.05 *

表2 重回分析

学校適応	0.592 **	0.486 **	0.503 **	0.345 **	0.744 **	0.688 **	0.615 **	0.294 **	0.183 **	0.339 **	0.205 *	0.403 **
意欲	0.486 **	0.440 **	0.305 **	0.345 **	0.744 **	0.688 **	0.615 **	0.294 **	0.183 **	0.339 **	0.205 *	0.403 **
精神的健康	0.486 **	0.440 **	0.305 **	0.345 **	0.744 **	0.688 **	0.615 **	0.294 **	0.183 **	0.339 **	0.205 *	0.403 **
自尊感情	0.486 **	0.440 **	0.305 **	0.345 **	0.744 **	0.688 **	0.615 **	0.294 **	0.183 **	0.339 **	0.205 *	0.403 **
コミュニケーション	0.486 **	0.440 **	0.305 **	0.345 **	0.744 **	0.688 **	0.615 **	0.294 **	0.183 **	0.339 **	0.205 *	0.403 **
ソーシャルスキル	0.486 **	0.440 **	0.305 **	0.345 **	0.744 **	0.688 **	0.615 **	0.294 **	0.183 **	0.339 **	0.205 *	0.403 **
家族関係	0.486 **	0.440 **	0.305 **	0.345 **	0.744 **	0.688 **	0.615 **	0.294 **	0.183 **	0.339 **	0.205 *	0.403 **
利用者との関係	0.486 **	0.440 **	0.305 **	0.345 **	0.744 **	0.688 **	0.615 **	0.294 **	0.183 **	0.339 **	0.205 *	0.403 **

P<0.05 * P<0.005 **

表3 重回分析

学校適応	0.395 **	0.080	0.044	0.099	0.094	0.053	0.0517	0.0517	0.0517	0.0517	0.0517	0.0517
意欲	0.270 **	-0.010	0.456 **	0.016	0.375 **	-0.059	0.064	0.762	0.762	0.762	0.762	0.762
精神的健康	0.082	-0.017	0.368 **	0.437 **	0.206	0.052	0.163	0.647	0.647	0.647	0.647	0.647
自尊感情	0.028	0.433 **	0.208 **	0.444 **	-0.122	0.128	-0.085	0.769	0.769	0.769	0.769	0.769
コミュニケーション	0.053	0.013	0.368 **	0.444 **	-0.122	0.128	-0.085	0.769	0.769	0.769	0.769	0.769
ソーシャルスキル	0.063	0.013	0.368 **	0.444 **	-0.122	0.128	-0.085	0.769	0.769	0.769	0.769	0.769
家族関係	0.053	0.013	0.368 **	0.444 **	-0.122	0.128	-0.085	0.769	0.769	0.769	0.769	0.769
利用者との関係	0.053	0.013	0.368 **	0.444 **	-0.122	0.128	-0.085	0.769	0.769	0.769	0.769	0.769

P<0.05 * P<0.005 **

VI 考察

1. 自己覚知と自己変化を引き出す重要性

自己覚知用紙の信頼度が低いため、各項目での関係や差は調べず、度数だけで考える。83人中78人(93.9%)は変化があったと感じており、ほとんどの学生は自己覚知していたと考える。井上⁹⁾は「自分を知るということは自己概念を揺さぶられる体験である」と述べている。自己覚知することは自己理解の一手手前であり、本学校でも初期介護実習の影響¹⁰⁾があったといえると思う。

74人(94.8%)は自己変化の内容について「介護の考え方が分る(介護ってこうなんだ)」「学習の取り組み方(勉強の必要性)」「社会的な態度ができた」など肯定的変化内容であり、これは武藤¹¹⁾の「実習を経験したことによって実習に対する心構えは殆どの項目で変化していること、変化の方向は全般的に肯定的である。」と同じ内容であった。

自己変化に一番影響を与えたものは32人(41.0%)が「利用者」、38人(48.7%)が「施設職員」「施設実習担当者」であり、また自己変化に影響を与えられたことは52人(66.6%)が「態度」「行動」と答えており、実習という場ではあるが、「言葉」での学内教育とは違い社会から受ける「態度」「行動」教育によって自己変化が進んだと考えられる。

上記から、学生にとって早期初期実習は効果がある。本学においては7月初期に初期実習を行っているが、もっと早い時期に実習を組み入れ、自己変化を促し、自己覚知することができ、学習意欲の態度を変容させることができれば、効果的な学習につながると考えられる。また、ボランティア、町内会での奉仕、高齢者とのふれあいなど社会参加することによって、より早く介護福祉士の自己概念ができると考える。

初期実習における自己変化への影響を学生が自己覚知することが大切である。今回の調査をしてみた結果、自分が変わったことに対して認識をさせることにもつながった。介護福祉教育においては、実習指導という時間があるため、その気づきをさせる振り返りを効果的に行う必要がある。また、自己変化や自己理解、自己啓発を促す研修や集団体験教育¹²⁾を含めたカリキュラム内容の検討が必要であると考えられる。

自己変化に影響を与えた人は圧倒的に利用者であった。次に多いのが施設職員、施設実習担当者であった。「教員」「ゼミ教員」はわずか3人(3.9%)であるという結果は、これは初期介護実習の特徴を現していることでもある。介護現場を理解し、利用者の生活状況を把握してることがおもな目的であるため、現場の影響力が強いものになっていると考える。しかしながら、初期実習では学生に与える影響は大きいものがあるので、教員としての関わり方を検討することが必要であるのかもしれない。

2. 自己覚知の有無と自己理解

自己覚知の有無により「自己理解の10領域それぞれの総和平均」において有意差はなかった。

これは日ごろ、自分の感情に気づいたり、自分が何を大切にしているか、対人関係の傾向など自分自身と対話することに慣れていないため、自己変化の有無自体分らなかったのではないか。変化していないと答えている5人の学生も内面は変化しており「自己理解の10領域それぞれの総和平均」に差がなかったのではないかと考えられる。反対に変化していると答えている78人の学生の中にも、変化していない学生も含まれていたのではないか。吉浜¹³⁾は「ふりかえりの作業で、自己意識の変化に着目して、それを手がかりに実習体験の内容を

吟味することは、対人関係発展の学習に有効な方法だろう」と述べているように、実習そのものからも多くの影響は受けるが、振り返ることによって自分自身と向き合うことができ、自分を見つめることとなり、そのことが後の対人関係へ影響を及ぼしていくと考えられるため、日々経験したことの自己への振り返りが特に必要性であると考えられる。

また78人と5人で度数の差が大きく、検定差として表れなかったかと思う。これらのことは、自己覚知の用紙の信頼度が低いために起こってきたことであると考えられる。

3. 自己理解の領域それぞれの関係

自己理解10領域中「セクシュアリティ」を除く9領域それぞれに有意な関係があった。領域それぞれに有意な関係があるため、その中でも何が強く影響しているかを調べるために重回帰分析を行った結果、自己理解の1領域に対して1～3つの自己理解の領域が有意に影響を与えていた。1つの領域を刺激するとそれに従属している領域も刺激され高くなるということである。従属領域の理解度が高まるということは、結果としては肯定的な理解へと進むこととなる。

では、教員としてどの領域に刺激を与えることができるだろうか。

「学校適応」は学校にどのくらい馴染んでいるかという問いであり、学校が好きであるかということである。これは授業が面白いか、ついていけるかにも影響されるところで、教員の腕の見せどころであると考えられる。「意欲」は努力すること、責任感、目標を持っているかなど性格にかかわることがあり、それを変化させるには困難を極めると考える。「精神的健康」は落ち込むことがあっても回復が早い、劣等感を感じない、心はたいてい安定しているなど、性格、人格にかかわることであり、ゆっくりとコミュニケーションをとることによって、変化が少しずつ現れる領域だと考えるため、忙しがっている教員ではそれへの刺激も難しいと考える。「自尊感情」は自分には魅力があると思う、人に合わせるよりも自分の個性を大切にす、自分を好ましい人間だと思っているなど肯定的な捕らえ方で、今の学生には比較的適しており、教員側の短時間なかかわりの中でも刺激を与えることができそうな領域であると考えられる。「コミュニケーション」は相手がいいて、相手との関わりの中で生まれてくる。固定した友人、好きな友人とだけしか、関わりを持とうとしない今の学生にはそこに刺激を与えることは難しいと考える。また教員との会話も一方的な授業の関係が多く、必要なことのみを通りいっぺんの会話になりやすいと考える。「アイデンティティ」は介護福祉士が社会に貢献する職業である、自分の個性や能力を生かせる職業である、この職業を選んでよかったと思うなど、介護職の誇りを感じさせる教授を心がければ刺激される領域ではないかと考える。「ソーシャルスキル」は自分に非がある時、謝ることに抵抗が無い、目上の人と接する時、まごつくことがほとんどない、予定が変更になったり、思う通りにいかなかった時でも投げ出さないなど、今の学生には苦手な領域であると考えられる。「家族関係」は親との関係に関したことなので、教員からアドバイスすることは難しい、また「利用者との関わり」は利用者に接し考えること感じることなので、学内での指導は難しいが、巡回指導を効果的に行う必要がある。利用者とのかかわりの中で、学生が感じたり気づいたことを漠然としたままにおかず、明確にする必要がある。そしてある程度の介護の方向性を示していくことが必要である。

教員がかかわりを持ちやすい領域としては「学校適応」「自尊感情」「アイデンティティ」

であると考え。学生のレディネスを考え理解し易い授業を心がけ、できるだけ学生を認め個性や魅力を引き出す日々の対応をし、介護福祉士は社会に貢献できる職業であることを伝えていく。この3つの領域を刺激することで他領域が刺激され、それがまた他領域を刺激するという連動が繰り返されることが考えられる。

重回帰分析で影響を与えていなかった領域でも、1領域には10項目あるため、その中の1項目について刺激を与えることによって、その領域が高くなり従属するものも高くなることもあると考える。

教員はあきらめず、そのつど色々な領域に刺激を与え続けることが学生の自己理解を高める方法であり、ひいては自己概念の明確化へとつながっていくと考える。

VII 研究の限界と今後の課題

初期実習の自己変化は、実習前後で尺度を使用し検討すれば有効であったと思うが、教員になりたての私は、学生が実習後にとても大きく変化したと感じられたため、そこに疑問を持ち実習後に検討することとなった。

実習後の自己変化、自己覚知の重要性を感じたため、できるだけ自己覚知できるような学習支援とは何かを考えていきたい。

VIII 結論

1. 介護学生は初期実習後にほとんどの学生（93.9%）が自己変化したと自己覚知していた。その内容は「利用者」「施設職員」からの「態度」「行動」であった。
2. 自己覚知の有無による自己理解には有意な差がなかった。
3. 自己理解の領域にはそれぞれ関係があり、影響を及ぼしあっていた。

IX 謝辞

本研究の実施にあたり、快く調査に協力してくださいました学生の皆様、研究の場を提供してくださいました教員の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 上田智子 介護学生のリアリティーショックの様相：岡崎女子短期大学研究紀要 第38号 P35～43 2005
- 2) 武藤久恵他 介護実習の早期実施に関する有効性の検討：岡崎女子短期大学研究紀要 第37号 P15～25 2004
- 3) 新實夕香理 看護学自習における自己教育力と授業過程評価の変化及びその関係：長野県看護大学紀要 vol.6 P61～71 2004
- 4) 井上聡子他 精神看護実習に求められる教授活動のあり方—実習終了時の質問紙による学生評価から—：川崎市立看護短期大学紀要 第8巻P11～20 2002
- 5) 高橋五江 社会福祉援助職の自己覚知について：淑徳大学研究紀要 第28号 1994 P163～176 1994
- 6) 山本銀次 自己覚知に関する教育プロジェクトの検討：東海大学紀要文学部 第21号 P9

～19 1974

- 7) 高橋五江 社会福祉援助職の自己覚知について：淑徳大学研究紀要 第28号 1994
P163～176 1994
- 8) 福山清蔵；奥野茂代訳 自己理解：ナースのための自己啓発ゲームP42～46医学書院 1998
- 9) 井上聡子他 精神看護実習に求められる教授活動のあり方—実習終了時の質問紙による学生
評価から—：川崎市立看護短期大学紀要 第8巻P11～20 2002
- 10) 武藤久恵他 介護実習の早期実施に関する有効性の検討：岡崎女子短期大学研究紀要 第37
号 P15～25 2004
- 11) 武藤久恵他 介護実習の早期実施に関する有効性の検討：岡崎女子短期大学研究紀要 第37
号 P15～25 2004
- 12) 有沢孝治 参画型グループ・エンカウターの重層的参加体験に見る自己変容の効果：東
海大学紀要 教育研究所 No.8 P45～73 2000
- 13) 吉浜文洋他 精神看護実習における学生の自己意識の変化について：静岡県立大学短期大学
部 特別研究報告書（13・14年度）-50 P1～12